

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 14 回 第 5.1 節～第 5.2.5 節

2018 年 7 月 15 日

小 田 勝

今回から始まる「第 5 章 時間表現」は、私にとって、たいへん苦手な領域である。私を書き得ることは、123 頁 18-19 行の下線部に尽きるのであって、これ以上付け加えることはない。ここでは、若干の用例を追加することで、補遺稿にかえたいと思う。

「5.1 テンス・アスペクト」の 125 頁 5 行目の用例の出典は、初刷に「撰集抄 10-2」とあるが、「撰集抄 9-2」の誤りで、第 2 刷で訂正されている。同頁の下方の表(10)について。次例は、あるいは「つ+なむ(希求)」のようにもみえる(「浮き出なん」と読むのかもしれない)。

- ・頼りなみなき名は沖に浮きてなん寄るべき浦にみるめだになし(素性集)〈底本は冷泉時雨亭文庫本。西本願寺本は第 3 句「こぎいでなむ」〉

「つ・ぬ・たり」に命令形があることは周知のことであるが、禁止形の用例となると、容易には得ない(下例、「な」の上が連体形「ぬる」であるのは、25 頁用例(6)を参照)。

- ・あひかまへて一所へばし落ちぬるな。(保元・金刀比羅本)

「5.2.1 ツ形」の 127-128 頁、用例(10)～(15)の類例を追加する。

- ・年頃よくくらべつる(=親シクツキ合ッテキタ)人々なむ、別れがたく思ひて、日しきりにとかくしつ(土佐)
- ・世の中の諒闇脱ぎあはる。…日頃は夜の御殿の御帳もなかりつれど、ありしやうに立てられなどして(讃岐典侍日記)

128 頁の用例(12)は、初刷・第 2 刷で「思ひ給へ絶えつる」とあるが、「思ひ給へ絶えたりつる」の誤記であり、第 3 刷で訂正した。ただし、そうなると、「たりつ」の例になるので、この箇所(用例(10)～(15))の例としては不適切ということになる。

「5.2.2 ヌ形」の 129 頁、最初の◆の類例をあげる。

- ・かくあまたの人を賜ひてとどめさせ給へど、許さぬ迎へまうで来て、取り率てまかりぬれば、口惜しく悲しきこと。(竹取)〈カグヤ姫ノ帝ヘノ消息〉
- ・ただ一人、ねぶたきを念じて候ふに、「丑四つ」と奏すなり。「明け侍りぬなり」とひとりごつを(枕 293)

上記第2例について、「丑四つ」は午前2時半頃だから、「夜が明けてしまったようだ」とは解せない。小林賢章(2003)によれば、古代の日付変更時は丑と寅の間、午前3時であり、これは「夜が明けてしまいそうだ」「もうすぐ日付が変わりそうだ」の意を述べたものと解される。

129-130 頁用例(6)～(9)の類例を追加する。

・ a 時雨つる空のけしきをひきかへてことにも月のすみのぼるかな(為忠家後度百首)

b なごりなく時雨の空は晴れぬれどまだ降るものは木の葉なりけり(詞花135)
次のような「ぬ」は、よく分からない(あるいは「生き出づる人」のような意を表すのだろうか)。

・世の中に生きとし生きぬる人は[生^{トシ}生^{ヌル}世中人]、父母の恩を蒙らずといふことなし。(東大寺諷誦文稿)

「5.2.3 「つ」「ぬ」の接続する動詞について」の131頁、用例(6)～(9)の類例、

・いたづらに咲きつる花か都^{みやこ}人かよふともなき宿のあたりに(大武高遠集)〈万代集「咲きちる」〉

・明けつらん空さへ今朝はつらきかな天の岩戸を今はさせ(=閉ザセ)かし(堀河百首)

132 頁用例(14)(15)の類例、

・[出家シタコトヲ]忘れては、誰がことぞとおぼめかれつる。(多武峰少将物語)

用例(18)～(20)の類例をあげる。

・さきざきも申さむと思ひしかども、必ず心惑ひし給はんものぞと思ひて、今まで過ぐし侍りつるなり。さのみやはとて、うち出で侍りぬるぞ。(竹取)

・かぐや姫は、罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれがもとに、しばしおはしつるなり。罪の限り果てぬればかく迎ふるを、翁は泣き歎く、能はぬことなり。(竹取)

133 頁「5.2.5 状態性述語のツ形・ヌ形」、次例は「ありぬ」の已然形の例で既実現(または恒常条件)の例である。

・ありぬればつきなくなりぬ女郎花人知れずこそ折らむとは思へ(躬恒集)

些末なことであるが、134 頁用例(8)(9)の出典表示「源氏」は「源」と表示すべきだった。

[引用文献追加] 小林^{たかあき}賢章2003『アカツキの研究』和泉書院